フランス人と移民の間で

与えられたアイデンティティとマグレブ系移民第二世代の自己主張

植村　清加

はじめに

1998 年のワールドカップサッカーでフランスが優勝して以来、日本でも現在のフランスは多人種・多文化の国だということが印象づけられたようだ。フランスでは多くの「フランス人」が熱気と興奮のなかでラ・マルセイエーズを合唱し、フランスチームは現在のフランス社会の略図であり、多民族、多文化が見事に溶け合ったからこその勝利だとして、フランス社会の「多様性」とその融合が讃美されていた。そのなかで、「『本当』の国旗の色はブルー・ブラン・ルージュではなく、『ブラック・ブラン・ブール』だ」という言葉も聞かれた。ブールとは、1980 年代の社会運動の「主役」でもあったマグレブ系移民第二世代が、自称として使用し始めた名称である。生まれ育ったフランスで、子供の頃から「マグレブ人」とか「アラブ人」、「移民」だと名指されてきた人々が、「アラブ」を逆さまにした「ブール」という言葉を、自分たちを表現する言葉として創り出したものである。その「ブール」ともいえるマグレブ系移民第二世代のジダンがチームのリーダーだったことが、優勝を称える論調において、フランスは人種差別の国ではないというポジティブで象徴的な意味を持っていたのだ。

本論では1980年代にはじまるマグレブ系移民第二世代(1)の自己主張以降、ブールという名称がフランスの公式的な言説のなかで与えられてきた意味とそこからずれていく自称としてのブールの意味を考察するとともに、「永遠の移民」と「フランスのブール」の間を行ったりきたりさせられる人々が、その表象のなかでどのように自分自身の声を発しているか、みていきたい。そこには、フランスで公認される「ブラック・ブラン・ブールの統合」からは抜け落ちる、別の形の「ブラック・ブラン・ブール」のつながり方が見えてくるだろう。

1 フランスのマグレブ系移民

現在のフランスには、移民および移民出身者と呼ばれる人々が多数存在する。フランスは 19 世紀末から移民の労働力を必要とし、積極的に移民を受け入れてきた。第二次世界大戦後、1960 年代まではヨーロッパ諸国（ベルギー・ポーランド・スペイン・イタリア・ポルトガル等）からの移民が多かったが、60 年代以降、新らたに増加したのが旧フランス植民地だったアルジェリア、モロッコ、チュニジアといったマグレブ諸国からの移住者だった(2)。当時のフランスは、「文化的距離が近く」、「フランスに適応が可能」だという理由から、ヨーロッパ地域からの移住者にはフランス人労働者とほぼ同等の権利を与えて帰化を奨励していたが、旧植民地からの移住者に対しては、「文化的距離が遠く」、「フランスに同化できない」として、男性の単身・短期の出稼ぎによる循環的移入を行っていた。

73 年の石油危機による経済危機を転換点として EC 域外からの移住を制限し始めると、男性・単身・短期の出稼ぎ移民の滞在は、家族を呼び寄せたりフランスで結婚するなどして長期化・家族化しはじめる(3)。以降、フランス社会は、労働の場だけでなく「イスラム教徒で、全く文化の違うマグレブ人」とともに子供を育て、生活することになり、生活の様々な場面での衝突も起こり始める。同じ頃からマグレブ系住民を主な標的とする人種差別事件が増加し(4)、移民排斥を唱える政党である国民戦線（Front National。以下、FN）が台頭するなど「定住を始めた非ヨーロッパ移民」は、政治問題や社会問題の焦点となっていく。

2 移民第二世代、あるいはブール

移民第二世代研究は、主に 80 年代に移民第二世代というカテゴリーが成立することにより盛んに行われるようになった。ヨーロッパ系の移民の場合は、二世代目以降は「フランス人」になるという認識が支配的であり(5)、マグレブ系移民も当初は単身・短期の出稼ぎだったため第二世代は特に注目されていなかった。しかしマグレブ系移民の定住以降、彼らはフランスに同化できない、つまり普遍的で民主主義的な価値を共有する「フランス人」になれないとされたため、彼らを「フランス人」から区別するために「移民第二世代」いういい方が出てくる。彼らはフランス人としての自覚や文化を身につけていないのに、フ

ランスの出生地主義により国籍だけを有する「ペーパー・フランス人」と見なされ、フランス人になれない印として「移民」という名称を与えられたといえるだろう。

移民第二世代研究が盛んに始められることに決定的な影響を与えたのは、80年代以降、移民第二世代の若者たち自身が社会運動のなかで自己主張を始めたことだった。その大きな転換点となったのが1983年の「平等と反人種差別のための行進」と呼ばれる全国的なデモ行進であり、そのなかでパリ地域に住むマグレブ系の一部の人々が自分たちをブールだと自称するアピールを行った。このデモ行進にはじまる彼らの社会運動は、メディアを通して大々的に報道され、「ブール運動」として知れ渡った。次節では、この運動について詳しくみていきたい。

2-1 運動を用意したもの

移民第二世代は1983年に10万人がパリのシャンゼリゼ通りに集まった大行進の中心的存在となり、ミッテラン大統領との対話を果たしたことで新しい時代の「ヒーロー」とされた。しかし、彼らがメディアに登場するようになったのは、そのときが最初だったわけではない。最初は地方紙やテレビに「ヒーロー」としてではなく、「フランスの秩序を乱す移民出身の若者たち(6)」として登場した。それは80年代初め頃からの、リヨン郊外を中心とする若者たちの暴動――後述するように移民出身の若者を狙った人種主義の犯罪を警察と司法が公正に扱わないことへの抗議だった――がきっかけとなっている(7)。

郊外での警察と若者たちの衝突は79年以降たびたび起るが、一般的に知られはじめるのは、81年夏にリヨン郊外のいくつかの団地で若者たちが車を乗り回して火をつけたり、警察の車を燃やした事件からである。メディアはこの事件を「熱い夏」と名づけ、こぞって燃え上がる車や警察のバリケードの様子などを報じた。メディアや社会学者は、その後も暴動が続く各地の郊外団地を調査し、そこに住む移民家族の子供たちが学校で落ちこぼれ、仕事も持たずにぶらつき、近所の商店から万引きをしたりドラッグに手を出しているということを「発見」する。この発見はメディアを通して郊外以外の人々に伝えられ、郊外は、移民出身の落ちこぼれたちが暴れる無秩序の危険地区として印象づけられ

たのである。

しかし、メディアが報道した「荒れる郊外」の日常生活には別の暴力、不公平が存在し、「暴れる移民の子供たち」による異議が行われていた。例えば 1982 年 10 月、パリ郊外ナンテールのギュタンベール団地[8]では、団地前に住むフランス人が、団地の子供の声が騒がしいとライフル銃を撃ち、その流れ弾で団地に住む 19 歳の学生 Abdenbi Guemiah が死亡するという事件が起きた。団地の若者たちは親たちと一緒に GUTEMBERG という組織をつくり、公正さ要求するデモや交渉を行った[9]。リヨン近郊のブロンでは 9 月に Ahmad Boutelja（25 歳）が、10 月にはリヨンで Wahid Hachihi（18 歳）が殺害されるが、いずれも「隣人とのトラブル」による自衛行為として処理され、犯人は釈放される。Wahid の家族と友人は WAHID ASSOCIATION を結成し、警察が犯人に有利な調査を行っていると抗議した。翌 83 年 3 月、リヨン郊外マンゲットの団地では若者と警察の衝突が起き、11 人の若者が警察と司法の二重基準に抗議してハンガーストライキを行い、4 月には Toumi Djaidja[10]をリーダーに SOS Avenir Minguette が結成される。

警察の厳重な監視の中にあった郊外団地では、若者たちと警察の関係はすぐに暴動や対立につながる状況にあった。Bouamama は 83 年夏の団地は「兄弟の血」の色をしていたと述べている［:54］が、兄弟の血が至るところで流されていた郊外に住む多くの若者たちにとって、警察に公正さを求めることは日常生活の中の重要な問題だった。メディアや政治において郊外の暴動は、同化できない移民の子供たちと頽廃した郊外団地という社会問題の象徴として論じられたが、「暴れる移民の子供たち」は、失業や友人の死の不公正な裁かれ方といった日常的で具体的な不公正に対する異議を表明していたのである。

2-2 平等と反人種差別のためのデモ行進

リヨン郊外の若者たちが呼びかけたデモ行進は、83 年 10 月、マルセイユのカヨールを 20 名ほどで出発する。当初、周囲の反応は婉曲な支持とラシストからの挑発しかなかった。しかしデモがリヨンに到着し、WAHID ASSOCIATION を中心に「自衛、警察、公正さ、メディア」についてのフォーラムが行われると、政治的・人道的なイニシアチブへの批判が郊外や移民出身の若者たちから出始

める。Bouamama によれば、リヨンで確認されたデモのイニシアチブには大別して二つの流れがあったという。一方は、聖職者や非暴力運動団体の主張を支持するヒューマニストや反人種差別団体、人権団体、左派・極左連合による反FN、反ファシズム支持者の流れである。他方、その流れを批判するようになったのが移民と郊外を旗印に集まる若者たちだった。彼らは生活における基本的な問題、とりわけ警察と公正さの問題を、反 FN という政治的メッセージや反人種主義という普遍的メッセージに置きかえられてしまうことに反対していた。その流れのイニシアチブをとったのは、マグレブ移民の子供たちへの活動を展開する ANGI、パリの自由ラジオ局を運営するラジオ・ブール、移民第二世代が中心になって活動する週刊誌サン・フロンティエール、そしてこのデモを支持する郊外の若者たちの組織だった。彼らの流れが前者と一線を画しているのは、彼らの主張が普遍的な人種差別への反対からではなく、日常的で個別的な人種主義や不公正に対する訴えだった点にある。

とはいえ、デモ行進自体は反人種主義を訴える人道主義的な主張に動員された様々な市民や知識人の参加、連日のメディア報道の効果、その効果を狙った市長や社会党議員などの積極的参加によって、郊外・移民の要求とは別の所で盛り上がり始める。1983 年 12 月 3 日、デモは郊外の移民第二世代の代表者がエリゼ宮でミッテラン大統領と対話を果たすという象徴的出来事によって幕を閉じる。

しかしエリゼ宮で彼らが得たものは、移民第二世代の大部分には必要のない10年間の滞在許可証と反人種主義という普遍的なメッセージだけだった。メディアや政治の舞台で理解されたこの運動の意味は、郊外の移民第二世代の日常生活の中で意味を持つ「警察と公正さ」の要求ではなく、普遍的な価値としての「反人種主義」、「平等」を訴えるものだったのである。

これらの運動は「ブール運動」と名づけられ、彼らはフランス的意識をもった新しい主体としてメディアや政治の言説のなかに取り込まれていく。そこでのブールは、労働現場でストライキをして労働条件の変更や労働環境の変更を迫っていた彼らの親たち――「移民」――とも、暴動を繰り返す「暴れるブール」とも違い、フランス的価値に基づいてフランス人とともに人種主義に異議を唱える「行儀のよいブール gentil beur」として一般化されていく。フランス性

を強調されたブール運動は、ヒューマニズムや民主主義、フランスの価値を尊重する人々による社会運動として、ヒューマニストや政治的左派のスローガンの下で肯定的に評価されたのだった。

デモ行進の成功やブールの活躍は、フランスの価値を身につけたマグレブ系移民の若者たちが、フランス人としての新しい自己像を社会に提示し、フランスの価値を共有することで、オリジンを異にする様々な人々が共存できるという感動を与えたと一方では理解されている。しかし 10 万人の心が反人種主義のもとで一つになったといいながら、なぜデモ行進の方向性が分裂したのか、なぜその後のブールたちはその自称を拒否したり、「ブールのための社会運動」を離れたのか。「新しいフランス人」として公認された「フランスのブール」と彼らが自己表現として用いようとしていたブールの意味は、どのような点で異なっていたのだろうか。

2-3 ブールというアイデンティティ

メディアでは、落ちこぼれでつねにいざこざを起こす「移民の子供たち」と表象されていた移民第二世代は、大行進以後の政治的言説において、ブールという名称の下、平等や民主主義といったフランス共和制の普遍的な価値に依拠して政治的主張を行う「新しいフランス人」という対照的な意味を与えられるようになる。しかし Bouamama が指摘するように、その過程でブールという名称は、第二世代たちが使い出した意味から離れていった。

リベラルな発言者は、移民第二世代を「根を引き抜かれた世代」「二重に引き裂かれた世代」「なにもかも始めから獲得しなくてはならないゼロ世代」だとして、彼らを「犠牲の世代」と捉える。しかし移民第二世代の主張した「自分たちの世代」というものは、「フランス人になる過渡期」にあたる人々の、世代的な悲劇のことではなかった。

パリ近郊の若者たちが主張したブールという自称は、「親とは違う新しい独自性があることを示すと同時にアラブというオリジンを肯定するものだった」［Bouamama:69］のであり、肯定的なアイデンティティの主張だった。 彼らは自分たちが名指され、枠にはめられてきた「アラブ人であること」や「アラブ文化の担い手であること」に違和感を感じ、自分たちはフランスで生まれ育っ

たということを強調する。しかしそのことは、彼らが「同化してフランス人になる」というでもなければ、親たちを通した「アラブ」への繋がりを否定することでもなかった。むしろ、全く異なるものとされている「フランス文化」と「アラブ文化」は移民第二世代の日常生活の感覚の中では自分の暮らしのなかで混ざり合っているものだった。それはブールという自称が、パリ近郊のサブカルチャー、特に音楽を媒介としたスタイルから出発(11)していることからもわかるだろう。パリ近郊の移民第二世代は、アラブ人として同一視されてきた親たちの生活スタイルと違って、自分たちが都市の多様な文化の消費者/創造者であることを主張したのだ。しかもその多様性の肯定を彼らは、負のアイデンティティとして恥じてきた両親の「根」を肯定する(12)機会にもしたのである。ブール運動の新しさは、彼らが自分たちを「フランス人」だと規定したことだけでなく、同時に「アラブというもう一つの根」を公言することを要求したことにあった。

ブールの自称の意味を考える上で重要なのは、「ブール現象は移民の若者と何人かの彼らのフランス人の友人の間を取り結ぶ場でもある」［Dubet:330］ということだ。Dubet は、マンゲットの「団地で、若者たちは移民を『われわれ』、フランス人を『彼ら』とは決して呼ばなかった。人間関係と友情は多民族的である。…子供の頃から彼らは人種ごとのゲットーに分かれているわけではない団地で同じような経験を生きているのだ」［:325］とも述べている。つまりブールという名称は、同じ地区で暮らす様々な友人たちとの日常的な人間関係のつながりを否定することなく自分を表現できる言葉として多くの第二世代たちに受けとめられていたのである。

そのような郊外の若者たちにとってブールという自称は、多民族的に構成された自分の身近な人間関係のなかで共有された「われわれ」に結びついていた。この日常生活に基づく感覚は、その後パリ地域の「行儀のよい」ブールたちが自分たちを統合されたフランス人として認知させるための自己表現として利用するようになったブールの意味とは異なっており、ブール運動のなかに、ずれを生じさせていくことになる。

2-4 ブール運動の分裂から

84 年以降、メディアや社会学的研究で注目されたパリ地域を中心とする移民第二世代の社会運動の担い手は、当時「ブールジョワジー」や「ブッピー」と呼ばれたエリートのブールたちだった。「おれの仲間に手を出すな！」というバッジをシンボルに大々的なデモを行うなど多民族で構成された反人種主義活動をはじめた SOS-Racism の活動や参政権を行使してフランス社会に参加しようと呼びかけてブール世代の政治的統合を推進する France Plus の活動はフランス共和制の価値に依拠しながら移民の社会統合を推進する活動として評価される。しかし反人種主義運動を行う市民運動と連帯しながらフランス社会への統合を推進し公的な権利を獲得しようとするその運動は、フランスの「社会統合」から切り離された状況にある郊外の若者や移民たちの生活と接点がないまま進行していく。郊外のブールたちは、運動以前と同じ状況のなかで生活していた(13)。彼らのうちの多くには相変わらず仕事がなかったし、警察の日常的な監視や対立がなくなったわけでもない。彼らにとって日常生活における「警察と公正さ」に対する訴えかけは、そのまま問題として残っていたのだ。

84 年以降のパリのブールジョワジーを中心とする運動には、共和制の普遍的価値に依拠するのではなく、多文化的フランス社会を求める別の流れもあった。例えば混合カップルをシンボルとして、多文化的フランス社会を主張した「平等のための結集 84」がある。その中心となった移民第二世代たちは、同時に第二世代と親世代の違いも、尊重しあえる差異として提示していく。結集 84 ではモーターバイクに乗り、様々な部品が混合することでバイクは走る、フランスもモーターバイクのようなんだと多文化的な主張を象徴的に示した。彼らはマグレブ人、アフリカ人、アンティル人、アジア人、フランス人からなる混成グループをつくり、各混成グループがルベ、ストラスブール、マルセイユ、トゥールーズ、ブレストを出発してパリで合流するという運動を展開する。彼らの運動は、親世代や移民との連帯を積極的に主張しながら、人種差別の問題や市民の権利を要求する多文化的な「新しい市民」としてブールを提示する方向性を持っていた。

しかし郊外のブールたち、とりわけパリ地域以外の人々はこの「多文化的市

民」としてのブール運動からも離れていく。彼らはフランス市民になるための運動も自分たち郊外のことを忘れ去っていると感じ始める。彼らは統合のための運動でも新しい市民としての運動でもなく、自分たちで組織をつくって移民や郊外の日常的な問題を解決するための活動へと移っていく。つまり、彼らはフランス社会に自分をどう位置づけるかということや公的な権利の獲得ではなく、「われわれ」の問題を解決することを重視したのだ。

ブール運動から離れていった郊外の移民第二世代たちのいう「われわれ」のつながり方と「結集 84」で示されたモーターバイク型の市民のつながり方の間には大きな違いがあった。郊外で、社会統合から排除された人々が示した「われわれ」のまとまりは、民族や人種、性別、世代等に基づく多文化の背景を持つ個人が互いの差異を尊重し合いながら「等しく」暮らすことを要求するような市民としてのまとまりではなかった。彼らは居住地区（シテ）を核となる単位としながら――シテは自分たち独自の領域で、なんでもそして誰でもよく知っている場所である――、その場所で「同じような」日常生活を送っている人々を「われわれ」あるいは「自分たちのような人々」として捉えている(14)。それは民族や人種から「自分は何者か」というアイデンティティを確保した上で他人と向き合うものではなく、日常的な他人とのつながり、人と人との「つながり」から自分たちを捉えるものである。そして彼らはそのような日常生活と連続した「つながり」のなかで、生活の中に組みこまれた不公正さに異議を唱えているのだった。

ブール運動と呼ばれた一連の行動は、どれも多民族的に構成されていたが、それらの運動が分散化していった理由は、民族的な多様さではなく、人々の間の日常生活とのつながりの多様さにあったといえる。ブールジョワジーたちの活躍は、法制度や政治的制度の改善に貢献し、移民たちのフランスにおける「公的権利」の可能性を広げることにつながった。そして新しい市民権に向けた活動は、フランスの同化・統合主義に対する抗議となり、多文化・多民族からなるフランス社会を一つの理想として提示することに貢献した。彼らの主張はフランスで公認されうる理想的な社会モデルの言説のなかに配置されていく。一方、郊外を中心とする移民第二世代の人々が発した自分たちが置かれている個別・具体的な状況での問題への抗議の声は、そのように公認されうる社会モデ

ルの言説になかに取り込まれずに、「問題を抱える郊外」「荒れる郊外」「失業と落ちこぼれの郊外」という言説のなかに配置された。彼らが多民族の仲間たちと形成する具体的な「われわれ」は、フランス社会の底辺に位置する「社会統合の困難な若者たち」という抽象的な集合としてしか理解されなかったのである。

3 フランス人であるということ

3-1 指定されるフランス人としてのあり方

ブール運動を支持することは、フランスの社会党政治あるいは普遍性の理念を支持する人々にとって政治的正しさを象徴するものだった。その正しさは、FNやラシストを不平等で普遍性に反する差異主義者と捉えることによって正当化されている。両者の対立は「フランス人」とは何かをめぐる戦いとしても表明されており、古くは共和派とカトリック勢力の対立、近年では「差異への権利 droit à la différence」をめぐる対立がある。

差異への権利は、フランス第三共和制が国民化を推進する中で抑圧してきた少数言語地域や移民などのマイノリティの人々が、地方言語復権運動やマイノリティの権利獲得運動のなかで、フランスの「同化主義 assimilation」に対する批判として支持したものである。同化主義の基礎にあるのは、フランス国民である全ての人が方言や地域性、移民の文化や宗教という「異質性」を消失させ、等しく「フランス人」になるというものだった。運動の担い手たちは「一にして不可分の共和国」という従来の国家観の下でライシテとフランス語を基礎とするフランス人化が強制されることに反対し、異なる言語や宗教の権利を訴えた。これらの運動を反映させた政策が「編入主義 insertion」であり、「自らの出自文化を保持したまま」、フランス社会で生きようとする考え方となった。しかし差異への権利の主張はその後、「一にして不可分の共和国」を人種や民族、宗教のモザイクに分断する危険があると批判されることになる。そのきっかけとなったのは、同じく差異への権利を掲げて台頭してきた FN 勢力の伸張である。

FN などの新右翼と呼ばれる勢力は、差異への権利に基づいて「フランス人のアイデンティティ」を要求し、移民排斥を展開しはじめる。それは差異を認めながら共に暮らすための「差異への権利」ではなく、フランス人の雇用を奪う

な、フランスはフランス人のものだ、フランス人は自分の国にいながら不当に権利を奪われていると訴えて、「本当のフランス人」を顕在化させ、移民との間に徹底的な差異を表明するものだった。

極右勢力の伸張によって差異への権利が否定的ニュアンスを持つようになると、FN に対抗する左派勢力やマイノリティの運動のリーダーたちは「統合主義 intégration」を推進し始める。統合主義の中では、「諸集団の文化的特殊性の尊重」と「法の前の平等」を両立させるために、社会統合の単位を個人に置くようになる。統合主義が移民たちの文化の独自性を消滅させることによって「平等」や「価値の共有」を目指す同化主義と違う点は、文化的・宗教的特殊性を保持した多様性・差異を尊重するところにある。また、移民たちの文化的独自性、多様性を重視する編入主義と違うのは、そこにフランス社会全体が共有する価値を求めるという点にある。それを理想的に叶えるのが個人を社会統合の単位とし、文化的特殊性を集団にではなく個々人の「私的な領域」においてのみ認め、「公的な領域」においては個々人がフランス共和国の一員として共通の価値観に同意するべきだとする政策なのだ。

80 年代の社会党政権誕生以降は、従来の同化政策が編入政策を経て、統合政策へと変わり、多文化社会としてのフランスが一つの理念となった時期であり、ブール運動もそのような政策の揺れのなかで展開されたものだった。ではマグレブ系移民第二世代にとって、これらの政策はどういう意味をもっていただろうか。「完全なフランス人」になることが要求された同化主義の下では、実際にはフランス人の扱いを受けなかったというだけでなく、第二世代の自己主張にあったオリジンとのつながりは切り取られていなくてはならなかった。編入政策では、彼らはマグレブ系移民という独自の存在、フランス人とは別の民族的・文化的集団として認められるが、それは彼らが表現するフランスとのつながりやフランス性を認めない位置を彼らに与えることだった。統合政策では、私的にはフランス人とは別の存在として、公的にはフランス人として生活するよう要求される。つまり、彼らはマグレブ系として一方では差異化・集団化されつつも、民族的・文化的集団から独立した個人としてマグレブ系フランス人にならなければならず、第二世代が日常的に持つ多民族的な「われわれ」のつながりや親たちとのつながりは公私の区別という形で分断されてしまうのである。

結局のところ、同化政策以降の多文化社会という理想のなかでは、ブール運動において日常的で個別的な人種主義への抗議や警察と司法への公正さの要求が、普遍主義的な反人種主義や平等主義に置きかえられたのと同じく、第二世代の自己表現に含まれていたようなオリジンとのつながりはエスニシティに、フランスとのつながりはナショナリティへと置きかえられてしまっている。そこには第二世代が日常的につくっている「つながり」を表明する場が与えられていないのである。

3-2 多文化／多人種／多民族社会フランス——統合の讃美

ここで冒頭で触れたワールドカップ時の言説を紹介したい。エメ・ジャケ監督率いるフランスチームは、統合政策を見事に具現したチームといわれ、それと同時に、この勝利は FN に対する勝利でもあるとされた。

リベラシオン誌は数日間にわたるワールドカップ特集のうち決勝進出を決めた 7 月 10 日、「男性、女性、白人、黒人、ブール——世界優勝チーム、統合モデルが成功」と題する記事の中で「彼らのうち何人が、人生で初めてトリコロールの国旗を振り、ラ・マルセイエーズを歌い、声をそろえて『われわれは勝った』という音頭をとったことだろうか…。…歴史はサッカーの試合が、ドイツ占領軍からのフランス解放以来この国に決してなかったような、職業、政治、性、民族といったあらゆる社会的カテゴリーの人々を集めたことを記憶にとどめるだろう。…ジャケのチームを支持する多くの人々によってアイデンティティの問題、つまりフランスとは何かということが示された…」と書いた。ル・モンド誌は、パリの街角で決勝進出を祝う「『ブラック、ブラン、ブール』の国民」と題する写真と「サッカーで混合が成功したなら、通りでだってうまくやれる」という街の声のタイトルと共に、街頭インタビューやジャケ監督へのインタビューなどの特集を組んだ。雑誌エクスプレスは、マルチカラーの選手たちや街頭の群集たちが肩を組んで、ラ・マルセイエーズを歌う横で、FN 党首、ル・ペンが泣いている挿絵を載せた。

これらをみてみると、目立つのはフランスチームを現在のフランス社会の略図や理想として捉える発言である(15)。街頭の声や新聞は、「ハーモニーが生きていた」、「私たちに理想を示した」、「今日のフランスのカラーで成り立っていた」、

「シャンゼリゼで勝利を祝う群集は今日のフランスの顔ぶれだった。彼らのチームのように、祝う人々は全ての皮膚の色で、全ての人種的オリジンを持つ人々だった」などの形でチームの印象を語った。また『移民の運命』の著者、E・トッドは、「日本の読者へ」の中で、このチームによって、「フランス人の人種や民族を気にしない態度が浮き彫りになった。…宗教的出身や肌の色といった問題に関心を持たずに、バランスよく機能している社会のあたかも縮図をみるようだった…百万人の群衆が無数の三色旗を振りながらシャンゼリゼを埋め尽くしたことは、フランスの文化システムのなかで国民（ナシオン）の観念と人種融合の観念の間に対立が存在しないことを示していた」［2000］と述べている。フランスチームを FN との対比から称える発言も多い。試合後、ディフェンダーのテュラムがトリコロールの旗を振り回し「この勝利はフランスのサッカーだけの勝利ではなく、フランスの人種的多様性の勝利でもある」と叫んだことを FN への勝利と報じた他、「この勝利は反ル・ペンという闘いに貢献するといわれている。私はそれをとても喜んでいるし、誇りにも思っている」というジャケ監督のコメントや「ブラック・ブラン・ブールのチームが多くの市民からラシストの思考を追い払わせることを願う」というコメントがあった。イタリアやアメリカの新聞も「ル・ペンに恥をかかせた」、「トリコロールがル・ペンから解放された」と報じている。また街頭インタビューの多くのコメントにも、ル・ペンに代表される移民排斥勢力を意識した発言が含まれている。

並んでドイツチームとの比較からフランスチームを称えるものもある。移民と統合に関する研究で知られる人口学者 Michèl Tribarat は、「金髪選手だけで少しもトルコオリジンの若者がいなかった」ドイツと比べ、フランスの普遍的で開かれた国籍と統合とによって、あらゆるオリジンの若者たちが「われわれは勝った！」と叫ぶという「坩堝フランス」の理想が現実化したのだと述べている。またエクスプレス は血統主義のためトルコやギリシャ、ユーゴスラビアの名を持つ選手のセレクションを禁じていたドイツでは、人種的マイノリティがいないチームのひ弱な結果に批判がでていると紹介し、勝ったフランスの混血チームは強さの象徴になったと報じた。

選手のなかでも特にジダンは、フランス社会への統合のシンボルであり、FN やドイツの血統主義と決別するフランスのシンボルであり、違いを乗り越えて

抱き合うことができる社会関係のシンボルであり、郊外から成功した者のシンボルとされた。ジダンやフランスチームを証としたブラック・ブラン・ブールという多様なフランスこそ、フランスの普遍性と寛容さを体現したものなのだ語られたのだった。

一方で、そのようなシンボル化を懸念する声もある。「移民の息子がフランス社会に認められるためには優れていることが要求される」、「黒人主義と外国人びいきは、スポーツと音楽においてはとても流行っているが、この二つの領域は他のところで外国人嫌いを表明している多くのフランス人のいいように使われすぎている」などである。

Amselle［1996］はワールドカップ以前に FN が主張するようなフランスの定義は「純血の人種主義」であるが、統合を推進する左派のフランスの定義も人種主義であり、「混血の人種主義」だと指摘している。混血の「ソフトな人種主義」は、植民地時代の黒人フランス兵やスポーツチーム、音楽の領域などで見られ、しばしばドイツと比較してポジティブに語られるが、様々な差異を巧妙に非還元的な差異として定めてしまうという。

98年のフランスチームを統合政策を見事に具現したチームと捉えるとき、人々は人種や民族に基づく「多様性」のなかに各々の位置を与えられた上でフランスと強く結びつけられる。フランスの統合を称える議論において、人々はブラック、ブラン、ブールという人種によって「どんなフランス人」か、「いかにしてフランス人たりえるのか」を規定されてしまうのだ。

街頭インタビューにはブラック・ブラン・ブールというフランスのまとまりにわき上がる声を批判するコメントもあった。22 歳の Sami は「集合性を補充するために中国人のセンターフォワードが必要になる」といって、「混血チーム」が利用されていることを批判する。また Yassine は「滑稽だね。みんなは外国人の息子たちのことを、フランスが勝ったときには彼らはフランス人だというんだから。彼らが囚人のときには、彼らはもともと外国人なんだって付け加えるっていうのに」という。郊外の青年 Djamel は周りのみんなの意見をまとめて「おれたちの暮らしは、ワールドカップで変わるわけじゃない」という。このチームの結束性や寛容さはショービジネスの世界のことであり、現実は違うというコメントもある。これらの声には、優勝の興奮を「フランス人」の物語に変え

られることや、政治やマジョリティに都合のいいように「外国人」にされたり「フランス人」にされたり、「フランスを構成する一つの色」にされてしまうことに対する反発が表れている。

とはいえインタビューに答えた人の中で多かったのはこのような批判ではなく、このフラタニテの興奮のなかで自分をフランス人と規定し、このチームの勝利を祝う声だった。しかしそれらの声のなかにも、それぞれの人がさまざまな「回路」を使って自分を「フランスという国」や「フランス人であること」と結びつけている側面がある。

そこには、モロッコ国旗を振りながらフランスの勝利を祝う人や、自分は「ル・ペンにいわせれば黒人」だけど「おれたちはまさにフランス人でフランスのために戦える」という人、「私はここで生まれたにもかかわらず、人生ではじめて自分をフランス人だと感じた」という人がいた。そして「ジダンはブールでシテで暮してた、彼はおれたちみたい」なんだ、「あのチームには郊外の奴らがいたんだ」というように、選手たちの生い立ちを自分に重ねた形でコメントをする人がいた。また「私たちはここで生まれたんだということを示したい」「モロッコが勝った時もうれしかった。フランスの勝利はまちがいなくもっとうれしい。ぼくはここで生まれたんだ」という形で、自分がフランス生まれなんだということを、優勝の興奮に重ねる人たちがいたのである。

彼らが街頭で勝利を祝ったのは、周りのフランス人が彼らの肌の色や宗教を「受け入れて」くれたからでもフランスの国籍取得がすべての人に開かれていたからでも、私的には多様性を持ち公的にはフランス人として統合されていたからでもない。彼らは、彼ら自身のアイテム——それはモロッコ国旗であったり、黒い肌であったり、フランスで生まれたことだったり、郊外育ちであることだったり、選手のファンであることだったり、街頭で一緒に試合を見ていた周りの人々だったりという様々なものなのだが——を使って、フランスの優勝を祝い、「われわれは勝った」と叫ぶ回路にしていたのである。

4 おわりに

ワールドカップでもてはやされた「ブラック・ブラン・ブール」は、統合の結果、フランスが一つにまとまったことへの讃美という形をとっていた。それ

は、坩堝フランス、多文化主義フランスの新しい社会モデルとして言及され、公式の言説のなかに肯定的に取り入れられた。

しかし公式の言説における「ブラック・ブラン・ブール」とは別のスタイルでも「ブラック・ブラン・ブール」は語られている。例えば、郊外の若者たちの暴力や人種・民族対立はフランスのメディアによって誇張されているのではないかという記事[16]がある。記者が、郊外で人種間の緊張はあるのかと尋ねると、インタビューされたグループ――マグレブ、ブラック、トルコ、ユーゴスラビアなどオリジンを持つ若者たちのグループ――の一人、17 歳の Mimoun はこう答える。「ああ、みんなラシストだね。よその郊外のやつらは憎しみを持っている。ここで、おれたちの間では人種の問題はないよ。ブール、ブラン、ブラック、人々はよく理解している。ここはおれたちのシテだ。みんな一緒に落ちこぼれて、みんな一緒になって喧嘩して、みんな一緒に退屈している。…（他の郊外も）おれたちみたいだ。白人もアラブ人も黒人もみんないるよ」

彼は、郊外のブールたちがブールという名称を自称として受け取ったときと同じように、自分たちの日常的な「よく知る」付き合いのあり方を表現するものとして「ブラック・ブラン・ブール」という形のつながりを使用している。彼らはフランス人としてのあり方や社会の中で個々人が日常的な関係と切り離された役割を指定されている理想的な社会モデルと違って、自分たちのよく知る具体的な場所と人間関係に根ざした「おれたちのシテ」における自分たちなりのつながり方を指し示す言葉として「ブラック・ブラン・ブール」を使うのだ。

ワールドカップチームが「ブラック・ブラン・ブール」のチームと呼ばれたことは、マグレブ系移民第二世代が発したブールという名称がフランス社会のなかですっかり市民権を得たことを示している。しかし、彼らがブール運動において、自分たちの「もう一つの根」として親とのつながりを示したり、自分たち独自の生活領域のなかで自分たちのまとまりを捉えていたことは、市民権を得て公認されているブールという名称のなかにすくいとられてはいない。同様に、ワールドカップの際に人々が様々なアイテムを用いて自分とフランスを結びつけたことや、彼らが自分たちの日常的な人間関係を示すものとして捉える「ブラック・ブラン・ブール」もまた、新しいフランスの社会モデルという

公式の言説のなかでは語られていない。けれども彼らが自分たちの「根」や自分たちの「まとまり」として示す日常的な人との「つながり」は、彼らの要求した生活の上での正しさや彼らの自己表現の出発点であり、彼らが自分自身の日常生活を捉える創造/想像力の基点となっているのである。

謝辞
本論文を草稿の段階から何度も読んでコメント・ご指導下さった成城大学院の小田亮教授に記して感謝申し上げます。

【注】

(1)　本論で使用する「第二世代」とはフランス国籍の有無に関わらず、フランス生まれ、あるいは幼い時からフランスで生活している人々を指している。各人の親たちの移住時期は異なっており、居住地域の環境、年齢などにも幅がある。

(2)　当初はアルジェリアからの移民が圧倒的に多かったが、70 年代からはモロッコ、チュニジアからの移住も増加する。

(3)　1976 年、家族の再結合による入国がフランス政府により公認されたため、移住は長期化・家族化する。

(4)　大きな事件としては、アルジェリアがフランス植民地下であった 1961 年夜間外出禁止規制に反対したフランス在住のアルジェリア人の虐殺事件――デモを行った人々に官憲が殴りかかった他、不審尋問対象者から数人を選びセーヌ河に投げ込んで溺死させた――や、1973 年マルセイユでのアルジェリア人の連続虐殺事件があった。以後もラシスム（人種主義）による犠牲者は相次いでいる。ベンジェルーンは、82 年 5 月から 83 年 8 月までの間にマグレブ人に対して行われたラシスムの犯罪とテロの略年譜を記しているが［1994］、それによれば犠牲者の平均年齢は 23 歳と、多くが若い人々であることがわかる。また、「アラブと黒人おことわり」といった札を貼るなど、サービスの拒否などもあった［林］。近年では「市民」によるラシズムだけでなく、警察の取り締まりの「行き過ぎ」による犠牲者も多くなっている。

(5)　ヨーロッパ系の人々も、20 世紀初めのイタリアからの移民が「にんにく臭さ」で語られたように「文化的違い」を強調されていたが、彼らは適応が速く、第二世代になると「フランス国民を形成する織物のうちに混ざり分からなく」［杉山:1997］なるとされていた。しかし非ヨーロッパ系の移民は「文化的に遠く」「同化できない」とされた。Abou Sada は「文化的距離」や「同化の程度」という概念がアフリカの人々、なかでもマグレブ系の人々を犠牲にして、ヨーロッパ系移民に有利に働く同化政策を支えてきたことを指摘している［1986］。

(6)　原語では les jeunes issus de l'immigration や les jeunes d'origine immigrée が使われることが多い。どちらも本来ならば「移民の血を引く若者」とでも訳すべき言葉であり、本論で使っている「移民出身の若者」という訳は日本語としては少々座りが悪いのだが、本人が移住者なのではなくフランス生まれであることをニュアンスに含みながらも「移民」という来歴を指示する婉曲な表現であることから本論では「出身」と訳している。

(7)　最初の暴動は 1979 年 9 月にリヨン郊外グラピニエールの H.L.M.で起った。H.L.M. とは Habitations à loyer modéré の略語で 1960 年代以降、大都市近郊に盛んに建設された低家賃団地のこと。はじめはフランスの様々な階層の人々が住んでいたが、徐々に裕福な人々は団地を出ていき、70 年代以降になって空いた部屋にようやく入居できるようになったのが移民たちだった。最初の暴動は団地に住む青年 Akim Tabet が逮捕され国外追放になったことに端を発している。ただし、抗議は始めから暴動という形を取ったのではなく、裁判所前でのデモ行進やハンガーストライキなどの方法によっても行われていた。

(8)　ギュタンベールは仮入居住宅団地（cité de transit）で、130 家族が住んでおり、多くが 50、60 年代に大都市周辺に大量に建設された掘建小屋バラック集落であるビドンヴィルから移り住んできた家族だった。仮入居住宅団地は移民家族が通常の住居（H.L.M.など）に移るまでの簡易住宅だが、移動できない人々はそのまま何年もそこで生活することになる。ビドンヴィルの暮らしについては林:1984 に詳しい。

(9)　団地では中学生を頭に復讐のための火炎瓶をつくりはじめたが、団地の青年たちの組織の説得で、犯人の家に火炎瓶を投げ込んだり、暴動を起こすのではなく、「二度とこの界隈のオヤジたちに動物のように狙ってほしくない。自分たちにも気位がある」［林:1984:12］とデモを行う。この自発的な組織の活動により、1985 年犠牲者たちの家族には普通の住居への移転が認められ、犯人の Depitout には 12 年の禁錮刑という有罪判決が出されることになった［M.I.B］。

(10)　Toumi Djaidja は、闘争のシンボルで、郊外地域以外の住民にも知られる有名人だった。83 年 6 月には彼自身、警官に撃たれて重症となっていた。83 年のデモは Toumi を中心にした団地の若者たちが、司祭 Christian Delorme やリヨンの教会の互助組織 C.I.M.A.D.E. (service œcuménique d'entraide)、非暴力組織 M.A.N. (Mouvement pour une alternative non violente)の協力を得てスタートする。全国デモのアイデアはアメリカの黒人たちの公民権運動から導入している。Delorme 司祭が Martin Luther King のテレビシリーズを映写した若者たちの討論会に、Toumi らマンゲットの若者が参加していたことがそのきっかけとなった。

(11)　主にパリ近郊の若者たちの間で、アメリカのロックを好みディスコに通っていた人たちが、当時の流行りだった「逆さ言葉」を使ってアラブという単語からブール

という自称をつくりだしたといわれている。同じ人がアメリカ音楽だけでなくフランスの音楽もマグレブのフォーク音楽も楽しんでいるという状況を反映した自己規定だったといえる。またマグレブ音楽もマグレブ系だけが楽しむ音楽ではなく、フランス人によっても消費される状況があったことも、ブールという自己規定が若者たちに受け入れられていく土台となっていた。

（12）　マグレブ系移民第二世代のなかには、自分の両親を恥じたり、その「出身」を否定的に捉える人もいた。ラジオ・ブールなどの活動は、そのような人たちに対して、「私たちの根を再発見」しようと呼びかけ、「根」の再定義を呼びかけるものだった。

（13）　郊外団地ではデモ行進後、移民の若者だけでなくフランス人の若者 2 人が警察の「行き過ぎ」によって死亡する事件が起きた。1984 年 10 月 16 日には運動の象徴だったToumiが車を盗みスーパーから 5000 フランを盗んだとして有罪判決を受ける。Toumi本人は関与を一貫して否認しており、郊外の人々はこの評決はマンゲットのスターを標的とした仕返しだと抗議する［Bouamama］など、事件が続いた。

（14）　Payrat はセーヌ・サン・ドニのある地区（cite）における若者集団独自の社会的契約や規則、独自の共同性について論じている［Payrat:2000］。Payrat はその地区の若者たちには独自の、共有された規則がある――そしてそれは年上のものから年下のものに伝えられる――という。特に地区における相互扶助の必要性は、他の地区の若者や警察との対立を通して常に議論される。規則を共有する独自の共同体を創造することで彼らは唯一の、そして独自の正しさを創り出し、シテを彼らの正しさの及ぶ独自の領域としているという。Payrat の報告から、彼らには「自分たちの地区」の範囲があり、その範囲に住むすべての若者は、仲の良し悪しに関らず、お互い何らかの性格づけを伴いながら認識しあう間柄にあることがわかる。

（15）　この節で触れるコメントは以下の資料を参照している。LE MONDE : 1998/7/ 12-13、7/18、Libération:1998/7/10、7/14、L’EXPRESS: 1998/7/16

（16）　“Le fantasme de l’intifada dans les banlieues”, *Courrier International* : 1999/2/18-24, No.433

【参考文献】

ABOU SADA, Georgres. “Génération issues de l’immigration: problemes de definition et aspects demographique” dans Abou Sada, G. et Milet, H (eds), *Génération issues de l’immigration*, 1986, Arcantere

AMSELLE, Jean-Loup. *Vers un multiculturalisme français*., 1995, Aubier

ベン・ジェルーン、タハール（高橋治男・相磯佳正訳）『歓迎されない人々 フランスのアラブ人』, 1994, 晶文社

BOUAMAMA, Saïd. *Dix ans de marche des Beurs*., 1994, Desclée de Brouwer

DUBET, François. *La Galère: Jeunes en survie*., 1987, Fayard

林瑞江『フランスの異邦人』, 1984, 中公新書

梶田孝道『新しい民族問題』1993, 中公新書

PEYRAT, Sébastien. “Les jeunes des cités : une communauté justice” dans *VEI enjeux migration-formation*, 2000, CNDP

杉山光信「フランスの人主差別（ラシズム）」、栗原彬（編）『講座差別の社会学 3 現代世界の差別構造』1997,弘文堂

トッド、エマニュエル（石崎晴己・東松秀雄訳）『移民の運命』1999 藤原書店

HP

Mouvement de l’Immigration et des Banlieues, 2000, http://mibmib.free.fr/

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第 2 号（2001 年 3 月発行）に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html